

システム論に基づいたケース理解を試みた事例

キーワード： いい子の挫折

システム論を生かした理解

危機介入

この事例解説では、システム論の考え方を生かした事例の理解の仕方についてまとめました。

問題の概要

J男は、小・中学校時代から正義感が強く、リーダーシップのある「いい子」と評価されてきた。

高校1、2年のときは、生徒会役員として活躍し、クラスでもリーダー的な存在と見られていた。ただ、級友と対立したり、クラスで浮き上がったりすることがあり、相談室に駆け込むことは何度あった。そのたびにじっくり話を聞くと落ち着き、またいつもの生活に戻っていった。欠席や遅刻等に結びつくことはなかったため、相談係も担任も、特に問題視してこなかった。

3年生になると、新しく赴任したベテランのA先生が相談係になった。J男は、4月末に突然、相談室をのぞきにきた。昨年何回か相談室に来たこと、今日は挨拶のために来たことを伝え、明るい表情で帰っていった。A先生は、J男については、引継ぎもなく何も知らなかったため、このときのことを特に気に留めることはなかった。

ところが、5月下旬から「級友とうまくいかない」「やる気が出ない」「なぜ大学に行くのか」「このまま学校を続けても意味がない」と言い、体調不良を訴えつつ、欠席し始めた。新しく担任になったB先生は、何度か家庭訪問して、定期考査も近いということもあり、まずは相談室登校をするように説得した。J男は、それに応じたが、身体症状を訴えつつ、相談室登校と欠席を繰り返していた。

この中で、J男から、大学受験や友人関係での悩み、家族に自分の思いがわかってもらえない悩みなどが話された。また、「みんなに申し訳ない」「自分が悪いのに、これ以上迷惑はかけられない」「退学し、もう一度最初からやり直したい」と考えていることがわかった。

現在、家族はJ男と両親の3人だが、両親とも働くことに追われ、J男の養育は中1まで祖父母に任せられてきた。父母は、J男の意思を尊重し、登校を強く促すことはしない。

当初、担任、養護教諭、学年長、相談係がチームを立ち上げて対応していた。しかし状況は好転しないため、スクールカウンセラー（SC）を加えて対応することにした。

対応の概要と実践のポイント

問題状況をどのように理解したか

担任はどのように理解したか

- ・教室では、確かに一人にいるようなときが多かったと思う。ただ、1、2年の時は、J男の担任ではなかったため、生徒会での活躍が印象深く、このようなことになるとは思わなかった。
- ・受験勉強で行き詰まってきて自信をなくし、苦しい現実から逃避しているのではないか。これをいい機会に「鍛える」ことが必要ではないか。早めに現状の厳しさを伝え、教室復帰を迫るべきである。
- ・両親は、どうも他人事のように対応している感じがする。強く登校を促すわけでもなく、J男とじっくり話をしているわけでもないようだ。J男との摩擦を避け、学校に何とかしてもらおうと思っているのではないか。
- ・両親は、J男に対し、もう少し本気がかかわる必要があるのではないか。

相談係はどのように理解したか

- ・これまでの相談記録を見ると、「クラスの雰囲気合わない」「数学が苦手。教科担任がキライ」「生徒会もうまくいかない」といった内容で何回か相談に来ているが、いずれも話を聞いてもらうことでストレスを解消し、自分なりの対応策を考えて段の生活に戻ることができるようだ。
- ・高3はストレスが増える。しばらく相談室登校をさせ、話を聞き、ストレスを緩和し、元気を取り戻させるのがいいのではないか。
- ・J男には、自分の考え方のパターンを自覚させ、もっとありのままの自分を受け入れ、今の自分でもいいと思えるように、認知を変容させることが必要ではないか。
- ・幼い頃から、「いい子」できたが、本当に母親に甘えたり、父親に叱られたりする経験に乏しい。そのため、挫折に弱く、今のように困難に立ち向かえないでいる。ここで、

「男が、自分は大切に思われていると感じられるように、両親は「男と一緒に楽しんだり、受容・共感的に接することが必要ではないか。」

チーム会議では、このような考えを出し合いながら、次のような対応策を講じていった。

相談係は、「マイナス思考」「他者に気を遣いすぎる」といった「男」の認知の特徴に気づかせ、「男」がもっと「プラス思考」で考えられるよう認知療法的な指導・援助をする。
担任は、リーダー性など、「男」のよさを自覚させつつ、挫折や困難を乗り越えることの大切さを説いていく。
養護教諭は、「男」の身体ケアの面でかわりながら、親子の親密さを増すことができるように、母親をサポートする役割をとる。

しかし、「男」のマイナス思考は容易に改善されず、ともすると、相談係も袋小路に入り込むような感じになった。

担任は、一生懸命「男」を説得しようとするが、「男」はだんだんと担任に会いたがらなくなってきた。

また、母親は、養護教諭の働きかけに対して、「そうですよね」「わかりました」と言いながら、積極的に取り組もうとしなかった。養護教諭は、そうした母親に、つい批判的な気持ちになってしまうのだった。

こうして、みんなが一生懸命かかわったが、事態は好転せず、徒労感が募るばかりだった。

なぜ行き詰まっているのか

問題状況の理解や解決策は一つではない。ある見方で行き詰まったら、柔軟に、いろいろな「見立て」を考えてみる必要がある。どの見立てがいいかという判断基準は、「どれが今の時点で最も解決への見通しがもてるものか」「関係者（とくに生徒や保護者）が前向きに取り組めるものか」ということと言える。



このような観点から、SCをチームに加えて、新たな視点から、対応の行き詰まりをもたらしているパターンをチェックを行った。

チェックのポイント

資源の活用が妨げられているパターンになっていないか？

過去に活用していた（うまくいっていた）パターンが、関係者間の働きかけの変化によって、うまく機能しなくなったのではないか？

問題解決への努力が、問題を維持させているパターンになっていないか？

「男」への働きかけは、苦しい時の「自分を責める＝批判・不満の矛先を自分に向ける同情、庇護を得る＝苦しさやストレス、挫折感を緩和する」パターンを否定することになっていないか。こうしたスタイルで得ていた安心感やバランスを崩すことになって「男」の不安を高めていないか。

養護教諭が母親に母子間の親密さを増すように求めることは、「母としての思いや苦労がどのようなものかわからないくせに」といった反発心や抵抗感を生んでいないか。

結局、誰かを犯人・原因とし、変容を求める（責める）パターンになっていないか。

どのように考えていくことができるか

システムのもっている資源、個人のもっている資源（能力）を生かすことを考える。

その資源（能力）は
リフレーミングで見つける

リフレーミング... 固定的な見方を変え、「事実」の「意味づけ」を変えること。（例：父親が子どもに厳しすぎて嫌われている」「嫌われても、しつこくきちんとしようとする父親



相談して、じっくり話を聞いてもらう中で苦戦と折り合い、乗り越えてきたJ男は、その「資源」を今、発揮できないでいる。また発揮できるようになるための「時間稼ぎ」をして、J男がじっくり聞いてもらえる人に「つなげる」。

資源を活用しやすい新しいストーリー（文脈）を作る

「内なる強さを発揮して困難に立ち向かうJ男」というテーマでストーリー（文脈）を考える。

「申し訳ない」「自分が悪い」という思いを強く持っているJ男に対し、「自分の責任として、この苦戦をすべて引き受けるのは、すごく勇気がいって、強い心がないと難しい。君のその強さはどこから来るのだろう？」として、J男の「強さ」とは何か、それを生かしてどのように苦戦状況をしのいだり、折り合ったりできるか考えてみる。

「あくまで理想的な生き方を求めようとするJ男」というテーマでストーリー（文脈）を考える。

「このまま学校を続けても意味がない」とか「学校をやめて、一からやり直す」と言うJ男に対し、「3年生のここまで来て、学校をやめて最初からやり直すというのは、よほどの覚悟で、自分の理想的な生き方を求めているんだろう。そこまでして求める君の理想的な生き方とはどんな生き方だろう？」として、J男の考えを引き出したり、キャリア教育を試みたりしてみる。

相互のかかわり合いのパターンの変更
問題を維持している相互のかかわり合いのパターンを見つけ、その中の一部分（ある人の、ある人に対するかかわり）を変えてみる。

【問題維持パターンの想定】

[J男の逃避的な言動 両親の許容的態度 担任・養護教諭のあせり・否定的感情
J男と両親への変化を急ぐような働きかけ J男や両親の拒否感（同意はしても変えようとしな） 担任や養護教諭のあせり・否定的感情 ……]

【問題維持パターンの変更】

例：両親の許容的態度を「J男への信頼感の表れ」「親の不安をJ男にぶつけて状況を悪化させないことを最優先にしている行動」などトリフレイミングして賞賛し、ねぎらう。

例：両親と、J男の問題が解決したら、何がどう変化するかを話題にして、その状態を先取りして実行してみる。

例：養護教諭に加え、SCを両親担当とする。

ポイント

悪者を作らない

本人の不備や足りなさ、養育の不備や足りなさに焦点を合わせず、J男の持てる力を伸ばす（何をもっているのか）ことを考え、「前向きなJ男」という「枠」を作る。

J男は、持てる力を発揮して、前向きにこの事態を乗り越えようとしているというストーリー（文脈）を作る。

単に言葉を換えることなく、こうした文脈にすることによって、

資源を使いやすくする
J男の痛みや葛藤の気持ち（感情）に焦点を当てやすくする

正しい文脈作りより、
元気が出る文脈作り

課題

「高1、2年の頃の相談室通い」「相談室への突然のあいさつ訪問」等、問題視するほどではないが、やや違和感を感じたり、少しひっかかりを覚える程度のときに、「情報をつないでおく」「時系列的にJ男の動き（変化）を整理してみる」などの初期対応（危機介入）の準備をするとしたら、どのような動き方ができるか、事例研究をしてみることも大切である。